

編集発行
群馬大学医学部同窓会

発行責任者 森川 昭廣
編集責任者 福田 利夫
〒371-8511
前橋市昭和町三丁目39-22
電話027-220-7861(ダイヤルイン)
FAX(電話兼用)027-235-1470

刀城クラブホームページ <http://tojowww.dept.med.gunma-u.ac.jp/> 同窓会事務局メールアドレス tojoclub@showa.gunma-u.ac.jp

退任記念送別会



退任される 小濱一弘教授、飯野佑一教授（左から）

目次

退任教授記念送別会 同窓会長 森川 昭廣… 2
 臓器病態救急学 教授 飯野 佑一… 3～4
 病態薬理学 教授 小濱 一弘… 4～5
 卒業おめでとう 同窓会長 森川 昭廣… 6
 平成21年度卒業生名簿… 7
 新任教授紹介
 国際寄生虫病学 教授 久枝 一 … 8
 母校に望む④⑩
 南魚沼市立ゆきぐに大和病院
 院長 宮永 和夫… 9
 追悼 古川 研先生を偲ぶ
 元同窓会長 饗場 庄一… 10～11
 平敷淳子先生講演会報告 福水 裕子… 11
 水芭蕉⑳
 スウェーデン留学を通して 山本 多恵… 12
 臨床研修センター便り⑫
 医学部附属病院臨床研修センター
 副センター長 大山 良雄… 13～14

学会報告（同窓会補助）
 整形外科学 教授 高岸 憲二… 14
 医学部代表者及び新任教授との合同懇談会
 幹事長 岡田 恭典… 15
 同窓会会員名簿発刊される… 15
 「重粒子線、切らずに治すがん治療と医療最前線」
 発刊のお知らせ
 中島 孝、白倉 賢二… 16～17
 支部だより… 18～20
 クラス会だより… 21～24
 群大産婦人科同門ゴルフ愛好会
 中村 淳… 24～25
 役員会だより… 26
 学内人事… 26
 学外人事… 26
 謹告… 26
 編集後記… 26

退任教授記念送別会**飯野、小濱両教授の
定年退任に際して**

医学部同窓会・刀城クラブ

会長 森川 昭廣 (昭44卒)



飯野・小濱両教授の退任に際して、一言御祝いと御礼の言葉を述べさせていただきます。

飯野佑一教授は昭和46年3月に群馬大学を卒業され、昭和47年に藤森教授の主宰されていた本学第二外科に入局されました。同53年から助手、平成2年から講師、平成5年から同助教授に昇任され、森下前教授の片腕として活躍されました。平成9年に新たに発足した救急部の教授に就任され、平成15年より大学院医学研究科臓器病態救急学教授になりました。この間、米国ウィスコンシン大学のClinical Cancer Centerに留学されました。先生は外科医として乳ガンを御専門とされ、数多くの患者さんの手術を手掛けられ、第二外科学教室の伝統である内分泌外科の中心として活躍され、また多くの外科医を育てられました。一方で先生は日本内分泌学会、日本外科学会、日本内分泌外科学会、日本乳癌学会等多くの学会の理事、評議員を歴任されました。研究的御仕事としては乳癌における薬剤耐性や乳癌についての分子生物学的アプローチによる研究を精力的に行われました。平成9年の救急医学部の教授になられてからは、数少ない部員とともに群馬県全体の救急医療、特に三次救急に尽力されました。種々困難な状況下で大学と言う立場からの救急を考えられ、臨床各科との連携をはかりながら、かつ、御自分も当直をされて若い医局員に模範を示されてきました。この間の献身的御努力については万人の認めるところであります。そして、日本臨床救急医学会、国際救急医学会に属し、群馬県救急医療体制検討委員として、また群馬県救急医療情報センター理事として活躍されました。また各科の連携をはかるため、群馬救急医療懇談会の事務局を運営され、さらにNPO法人群馬救急医療推進協会理事長として御活躍です。

先生は学生時代に柔道部に所属し、東医体でも活躍され、その後も柔道部員のみならず、学生・教職員と幅広く交流されておられます。先生のお宅にはしばしば若い方々が集まれ、談論風発でそのテーマも社会の事、大学の事、医学の事等、大変幅広く、その後輩思いのお人柄がそこにもよく出ていと聞

いております。

このように先生が外科の御仕事、救急の御仕事を着実にやり、多くの成果を挙げ、それを広く発信しました。

どうぞこれからも健康に留意され、益々御活躍されることを御期待申し上げお祝いと御礼の言葉といたします。有難うございました。

小濱一弘教授は昭和46年3月東京大学医学部医学科を卒業され、医師免許取得後、直ちに当時江橋教授の主宰される東京大学医学部薬理学教室に入られ、御仕事を始められました。昭和50年から同助手、54年から同講師をお務めになりました。昭和56年、英国MRC分子生物学研究所(ケンブリッジ)に留学され、昭和58年11月に帰国されました。帰国後、同助教授をお務めになられ、平成元年3月群馬大学医学部薬理学講座の教授になりました。本年3月に御退任される間、アメリカ合衆国マーシャル大学のAdjunct Professor、武蔵野大学客員教授を兼任されておられます。

御専門は細胞内Caに関する平滑筋の薬理学的研究であり、日本薬理学会、日本臨床薬理学会、日本神経化学会で評議員として活躍されてこられました。多くの学会を主催されてこられました。中でも平成19年には第5回United States-Japan Workshop on Cellular and Molecular Aspects of Vascular Smooth Muscle Functionをハワイで主催されました。そして平成6年にはカルシウムが阻害的に作用することによってなされる生体制御機構の発見によって、井上學術賞を受賞されています。大学では群馬大学共同研究イノベーションセンター昭和分室長、NPO法人北関東バイオフォーラム理事長として産学連携の御仕事の中心として貢献されました。また、大学院医学研究科における大学院生の教育、研究指導、医学部における学部学生との交流や教育にもお力を入れられました。特に新入生の歓迎行事での御活躍や大連医科大学との国際交流は高く評価されています。先生は一流の学者であり、また一方で高等学校の理科教諭や高校生に対してDNAの生物学の公開講座開催や分子遺伝子の実習を行いました。このように、先生は大学の内外で広い視野を持って御仕事をされ、その御仕事を通して群馬大学さらには、医学部の名を広く日本そして世界に発信されました。さらに、「組織ミオシン」についてを始めとして、数多くの特許を有しておられます。

どうぞこれからも健康に留意され益々御活躍される事を御期待申し上げ、御祝いと御礼の言葉と致します。有難うございました。

退任教授記念送別会

退任に思う

臓器病態救急学

教授 飯野 佑一 (昭46卒)



思えば、群大第二外科に入局後、藤森先生、泉雄先生、森下先生と三人の教授にお仕えし、昭和53年に助手になって以来32年が過ぎようとしている。いろいろなことが走馬灯のように思い出される。あつという間の32年間であった。臨床医でありながらこのような長期間1つの大学に籍をおいた人間も珍しいであろうし、又自分自身もよく長続きしたものだと言っている。楽しく酒を飲みながら相談に乗って下さり、時には愚痴を聞いて下さる先輩、そして時々酒に付き合っただけで遊んでくれる律儀な後輩に恵まれた事は事実であり、心より感謝している。溪流釣りや鮎釣りの思い出ばかりで、研究、業績に関するものは不燃焼な事ばかりである。

ここで、群馬大学在職期間のいくつかの思い出について述べる。

Ⅰ. ウィスコンシン大学への留学

急に話がまとまり、妻と子供たち（中2長男、小6二男、小2長女）と共にアメリカ合衆国ウィスコンシン州の州都マディソン（当時人口約20万人）にあるウィスコンシン大学Clinical Cancer CenterのV.C Jordan教授のもとに一年間留学した。今から21年前のことである。自分よりも15～16才位若いtechnicianにヌードマウス可移植性MCF-7を用いた実験やRIAによるホルモン測定法などを教えてもらっていた。

Jordan教授は私よりも3才若い（私のように44才で留学するのは珍しいのに面倒見がよく世界的に有名で後にFather of Tamoxifenと呼ばれた。Jordan教授は私が釣り好きであることを知っていて、Dr.Iino、君は研究のために留学しているのか釣りのために留学しているのかといつもジョークを言っていた。

週末には家族でよくドライブや釣りに行ったものだ。いずれにしても、家族が最もまとまっていた時期であった。私のように40代半ばという遅い年齢で、しかも家族と一緒に留学した者もいるのである

から、若い諸君には是非とも機会があれば積極的に留学を経験してもらいたい。

Ⅱ. 森下御大の特訓

留学より帰国後いろいろと辛い時期もあった。しかし、森下靖雄先生（森下御大）が第4代の第二外科教授に就任されてからは私にとって画期的な時期であったと思う。教室員の業績をcheckされておられた森下御大に教授室に呼ばれ、英論文の実績が欠損している期間について理由を聞かれた。正直に興味の溪流釣りのことを話すと御大は“3年間釣りは禁止”と私に告げられた。その後3年間、英論文の初歩から特訓を受けた事は今でも忘れない。ある休みの日、英論文のcheckのために大学にきていた御大が、昼食をとるために我家の前を通った際に庭で障子をはりをしていた妻に“亭主は今日はどうしてるの”と問いかけたそうだ。妻は約束を破って釣りに行った事を言おうかどうしようかと迷ったが、うそをつくわけにもいかないため正直に釣りに行った事を話したそうだ。御大は“聞かなかった事にするから彼には黙っているように”と言って下さった。意気揚々と帰宅した私はその事を妻より聞き急にしょんぼりしてしまった。翌朝、教授室の前で御大を待ち、“先生約束を守れませんでした”と謝った。今では笑い話となったがその時は真剣であった。

その後、平成9年1月（1997年）に群馬大学救急医学初代教授になることができたのも、平成13年6月（2001年）に第9回日本乳癌学会総会を前橋で主催（当時会員数6500名、参加者3000名、現在会員数8700名）する事ができたのも、これらすべて森下御大の御指導、御助力のお蔭と心より感謝している。特に乳癌学会の前身である乳癌研究会は昭和39年（1964年）東京オリンピックの年に藤森先生がつくられたものであり、長い間（27、8年間）事務局が第二外科にあったため責任を果たした感があった。

Ⅲ. 救急医学講座（臓器病態救急学）

教授1名、助教授1名、助手1名の小さな講座が誕生した。救急部との兼任であった。大部屋と教授室の2つの部屋以外に学生実習室や研究室もないstartであった。委任経理金で秘書を募集し、大部屋に助教授、助手、秘書用の机および臨床実習用の大テーブルを置き何とか形を整えた。今の臨床研究棟および共有棟のスペースが夢のようである。群大

病院内の救急体制の構築、特に各診療科の協力を得ること、マンパワー不足に対する対応、そして救急外来の整備や救急車搬入路の整備など全くゼロからの出発であった。それでも2004年10月23日の新潟県中越地震には、群馬大学医学部附属病院の第一次医療チームの隊長として小千谷総合病院を拠点に医療活動を行うまでになった。それ以来災害医療も含め、災害対策を教室のテーマの一つとしている。2009年4月より総合診療部と共同で診療に当たる救命総合医療センターが発足し、私が初代センター

長となった。今後益々の発展を願っている。

また、森下先生を中心に平成5年に発足した群馬県救急医療懇談会（事務局：群馬大学医学部救急医学）も今回で第17回を迎え、2009年9月6日前橋テルサで主催することができた。一般演題のほかに群馬県における災害対策を特別講演および教育講演のテーマに組み、500名以上が参加し、成功裏に終わることができた。長い間何かとご指導、ご助力を頂いた同窓会の皆様方に深謝する。

退任教授記念送別会

産学連携とわたし

病態薬理学

教授 小濱 一弘(特別会員)



私が産学連携とかかわりを持つようになったのは、今は故人となられた小宮教授(当時分子病態学担当)のあとを受けて、地域共同研究センター(当時)の委員を引き受けたことに始まります。委員会に出るだけの委員から私が脱皮できたのは、平成13年に、昭和町キャンパスに地共センターの分室をスタートさせたことに始まります。当時は国立大学に産学連携が強く要求されはじめたころでありました。医学部は附属病院を通じてそれを十分に実践しているのではないか！と言っても、もはや許される情勢ではなく、目にみえる製品を指向する流れにありました。医療関係では製薬会社主導の新薬の臨床治験をやっているくらいで、困ったなあ…と考えていたところ、助け船を出してくれたのが、当時の地共センター長の甲本工学部教授、そのあとの長屋工学部教授であった。昭和町キャンパスに分室を作りましょうということになり、研究協力課の植田課長が桐生のみならず荒牧・昭和のキャンパスをかけずり廻ってくれたことを昨今の様に思い出します。とにかく分室ができ、私が分室長ということになりました。医学部に特化した産学連携の部所ができたのは国内ではじめての事例で、群馬大学が医療・福祉・創薬の分野で産学連携に乗り出したと云うことを学内外にアピールできたと思います。ちょうど、医学部のツムラ寄附講座の「精神神経薬理」が終わったとこ

ろで、寄附講座を担当されていた丸山先生に引き続き客員教授になって頂き、分室を中心として種々の共同研究を組んで頂きました。まだ群馬大学が国立大学法人となっていない時代では、産学連携の推進に色んな規制があり、当時の赤岩学長に言われてNPO法人として北関東バイオフォーラム(以下NPO法人と略す)を立ち上げました。平成15年に医学部教授会に設立を諮問し、翌16年1月に登記をしました。バイオフォーラムの名前の由来は、平成12年、当時のポストゲノム時代に向かい新しい研究機器を群馬大学医学部の研究者に紹介する目的で神経薬理の白尾教授が開催してくれたことに基づきます。これをNPO法人で引き継ぎ、今日では大学院講義をかねて、夏休み前の医学部行事として定着しております。

産学連携の役に立ちそうなこととして、群大附属病院・近隣病院の臨床現場より、この様な機器があれば良いな！この様に改良されるといいな！というアイデアを企業家に聞いてもらう勉強会からスタートしました。当時は、研究のシーズ(Seeds)は大学に、ニーズ(Needs)は企業にというのが合言葉でしたが、逆転の発想が受けたかも知れません。大学病院にニーズがごろごろしていたのです。文科省よりコーディネーターが配置される様になり、勉強会のはばは広がった様に思います。時が流れ平成21年になります。重粒子線治療装置が昭和町キャンパスに建設中でありました。治療方面において世界有数の施設であるとともに、産学連携の重要な資産でもあります。工事中の施設を、NPO法人として計画し、見学会をやらせていただいたのも今は楽しい思い出となりました。

私、個人としては薬理学を担当し、イノベーション

ンセンターの分室長を兼任するとは、果たして何をすべきであろうか？という問は、いつも脳裏から離れませんでした。そうだ、自分の現在の筋肉蛋白研究を応用研究に生かして、少しでも成功させれば職務を果たせるだろうと思った。このヒントをいただいたのが共同研究イノベーションセンター須齋前教授でした。筋肉の主成分であるアクトミオシン系を応用しようと思ったのでした。研究費がなければ何もできない。上記の妄想を作文したところ、総務省の戦略的情報伝達研究開発推進制度（平成14年～16年）に当たってしまいました。もともと、地に足の着いた計画ではなく、あっという間にサポートの期間がすぎ、ろくなデータは出ませんでした。その後、群馬県のRSP事業や科研費の萌芽研究をもらいましたが、焼け石に水で、必要な研究費を得るすべもありませんでした。アメリカに持っていこうと考えたのでした。

こう考えたのも、血管平滑筋の収縮制御で科研費の国際共同研究で、ご一緒させてもらったWright教授(ウェストバージニア州, マーシャル大学)により、同校のBloughさんという准教授を紹介してもらったからでした。私は2006年(平成18年)よりAdjunct Professorのポストをもらい、当地での研究に身が入っています。具体的には、筋肉の主成分であるミオシンを駆動力発生源として利用すると、

ATPを消費し相棒のアクチン線維をうごかします。アクチン線維だけなら脆弱なので、これを束にして、さらに反応させるべき検体を荷物としてくっつけます。即ち、バイオチップ内に配管された直径が数マイクロメートルのチャンネル内の物質輸送をしようとするのです。この装置を一般にlab-on-a-chipといいます。日経先端技術やJST新技術説明会に紹介はされたものの、具体的な製品に結びつかず、もたもたしているうちに、定年となりました。アメリカでは本学工学部出身の高附君がポスドクとして頑張っていますが、大いに彼に期待したいものです。



(平成22年3月4日, マーキュリーホテルにて)

卒業おめでとう、 そして「絆」を！

医学部同窓会・刀城クラブ

会長 森川 昭廣 (昭44卒)



卒業生の皆さん、御卒業おめでとうございます。また、御家族の方のお慶びもいかにばかりかと存じます。まずは、卒業後の新しい人生でも皆さんの目覚ましい活躍を心からお祈り致します。

皆さんはこの前橋の地で多くのクラスメート、教職員や先輩・後輩、友人に囲まれて生活をしてきました。そして、多くの種類の経験をされてこれたと思います。特に大学では長い時間をかけて、医学を学び、医療のチームに医学生と参加して得た多くの知識や経験を土台に、医療人としてはもとより社会人として、さらに成熟されることを期待しています。ここでは皆さんに同窓会からの願いを記して卒業のお祝いの言葉とします。

群馬大学医学部同窓会刀城クラブが発足して58年が経ち、既に5,000人を超える会員がおります。ここ数年同窓会の1つの方針として本部はもちろん、地方の支部の活性化、充実への努力を行っております。各支部の総会を訪問してみますと支部の会員同士の交流と連絡が大変密なことに驚かされます。初めての地へ赴任した時の先輩のアドバイスが有難かったこと、手に余る患者さんについて快く診てもらったこと、研究で壁にぶつかった時の先輩からのヒント、開業の際の実際的なことについての助言など多くの方が母校の先輩、後輩を有難い友人として頼りにしておられました。一方で同じ市に住みながら先輩や後輩がおられることを知らない場合もあり、さらな

る会員同士の交流の必要性も感じました。

皆さんのバックには群馬大学医学部があり、そして会員組織である医学部同窓会刀城会があります。そこから発信される情報は人の結び付きをより強固なものにします。今年のキーワードは「絆(きずな)」と聞いています。人と人との断つことのできないつながりを意味する言葉です。この絆こそ皆さんの大きな財産になるはずです。研修生の現場の上司のみならず、同期生やクラブの先輩さらには同窓会の先輩へのアドバイスを求めることが、皆さんをブラッシュアップする大きな力になると信じます。これからの医療はチーム医療が求められ、そして多くの人的ネットワークが重要になると考えられます。大学での同じ時期に共通の目的に向かって行なった努力と協力を思い出し、卒業後も互いに連絡を取り合い、助け合うことに同窓会本部は最大限の努力と援助を払います。同窓会が単なる親睦をはかる会ではなく、皆さんの生活や仕事に役立つ会に変革を始めています。どうぞこの絆を切らずに、どのような場合でも同窓会を大きな情報源として活用され、一方で未来に卒業してくる後輩にも暖かい絆をつなげて下さい。



卒業時表彰



学位記伝達式後の集合写真 (平成22年3月24日, 刀城会館)

新任教授紹介

次はアマゾン あるいはナイルへ

国際寄生虫病学

教授 久枝 一(特別会員)



この度、2010年1月1日より国際寄生虫病学分野を担当させて頂くことになりました。鈴木守前群馬大学学長をはじめ4人の教授が作り上げてきた伝統のある当分野を引き継ぐにあたり身の引き締まる思いです。寄生虫学を取り巻く環境は厳しいものです。先進国では衛生状態の向上により寄生虫感染症は激減し、その結果、寄生虫研究が必要ではないとの判断で、多くの寄生虫学講座がなくなりました。しかし、世界に目を向けると、途上国では多くの人が寄生虫感染症に苦しんでいます。中でもマラリアはアフリカの子供達の命を数秒に一人のペースで奪っていています。このような状況を考えると、寄生虫研究は世界に貢献できると思います。その重要性を理解し寄生虫学領域の分野を存続させた群馬大学の慧眼に感謝し、それに応えるべく微力ながら全力であたる所存でございます。

私は1967年に香川県高松市で生まれ、1992年に徳島大学医学部を卒業しました。学生の頃から教室にお邪魔して研究のまねごとをさせてもらっていたご縁もあり、寄生虫学講座の助手となりました。教室を主宰されていた姫野國祐教授は、当時は比較的新しい学問であった免疫学を専門とされておりました。その指導の下、医学研究として感染症を対象とした研究を進めてきました。感染症の帰趨を決定するのは、宿主が病原体を排除しようとする力と、病原体が宿主の排除機構を打ち破って定着し増殖する力とのバランスです。従いまして、感染症を理解するためには宿主の免疫と病原体の病原性の両者に着目する必要があります。私は一貫して寄生虫感染における宿主寄生体相互関係を明らかにすることでそのコントロールを目指してきました。その間、98～01年には米国国立衛生研究所アレルギー感染症研究所にポスドクとして、その後は姫野教授の異動に伴い九州大学で研究生活を送ってまいりました。

寄生虫というと、サナダムシや回虫とかのお腹の中にいる目でも見えるニョロニョロと動く「ムシ」

を想像されると思います。サナダムシは成長すると10メートルに達するものもありますが、排除されることなく数年に渡って寄生します。これほどの大きさにも関わらず症状を出すこともなく、宿主に食と住を依存する究極の寄生状態を作り出しています。ここで、どうして宿主はこんな大きな異物を排除しないのか、という疑問が生じます。寄生虫が宿主免疫を巧妙に回避することは知られているのですが、それだけは説明がつかないように思います。宿主にとっても寄生虫がいることで良いことがあるのではないかと想像できます。つまり、寄生虫とはいうものの実は「寄生」ではなくて、宿主にも恩恵がある「共生」ではないのか、と思えます。まことしやかな話、衛生仮説というのがあります。昨今の衛生状況の向上で感染症が激減したことがアレルギーや自己免疫の免疫系疾患の増加の原因であるとする説です。寄生虫が免疫を回避する際に免疫をうまく調節するのですが、起こってはいけないアレルゲンや自己成分に対する免疫応答も調節していると推測されています。実際、アフリカで寄生虫に感染している子供達では感染していない子供達に比べて、アレルゲンに対する反応率が有意に低いことも知られています。寄生虫感染症が減ったことでアレルギーが増えた、衛生仮説の主役が寄生虫ではないかと思っています。事実、クローン病に対して寄生虫を感染させ治療しようとする治験でもいくつかの成功例があるようです。むやみやたらに寄生虫を駆除するのは良くないとも思えます。寄生虫も地球にすむ仲間、と考えて共存していくのも良いのではないのでしょうか。

私の研究人生は徳島で始まり、福岡で発展し、そして群馬で成熟を期しています。偶然なのですが、この3つの土地に共通することがあります。それは大きな川が流れていることです。徳島は吉野川、福岡は筑後川、群馬は利根川です。昔から「四国三郎」、「筑紫二郎」、「坂東太郎」と呼ばれています。まさにステップアップするかの様に、川を頼りに群馬にたどり着いたようです。運命めいたものを感じずにはいられません。日本の川は制覇したので、いよいよ世界進出でしょうか。寄生虫を求めてアマゾンか、それともナイルへ。いえいえ、群馬で頑張るつもりです。同窓会の皆様方のご指導・ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い致します。

母校に望む ④

母校に望むこと

南魚沼市立ゆきぐに大和病院
院長 宮永 和夫 (昭50卒)



私は、昭和50年卒です。1年間第二内科で研修を受けた後、2年目より精神科に移り、現在も精神科医として働いています。精神科入局当時は院外のローテーションがなかったことや、ローテーションが始まって後輩が優先されたため、結局、平成12年に大学を退職するまでずっと大学勤務のみで、他の病院勤務の経験はありませんでした。その後、群馬県職となり行政に片足を踏み入れたのですが、平成19年より南魚沼市立ゆきぐに大和病院の院長として、再び臨床現場に戻りました。

勤務先の南魚沼市立ゆきぐに大和病院は昭和51年に開院した199床の総合病院です。開院以降、保健・医療・福祉の連携と地域医療を中心的な理念として、新潟県の魚沼二次医療圏の中核病院の一翼を担ってきました。私は、非常勤医師として昭和54年より勤務していたため、半ば傍観者ではありましたが、ゆきぐに大和病院の栄枯盛衰を見てきました。大まかに言えば、開院当初より平成12年の介護保険実施前までは、地域医療を旗印にしていたこともあって、全国から多くの医師が集まり、内科と外科を中心に医師数も充実しかつ黒字経営でした。しかし、平成13年以降になると、バブル崩壊や医療費の制限を背景として赤字化が始まり、現在も赤字の額は少ないながらも同様の状態にあります。

私が就任した3年前、医師について最悪の状況になりました。内科医と眼科医の突然の退職と小児科医の急死など、悪いことが立て続けに起こり、病院存亡のピンチに立たされたのです。この時、群馬大学の複数の科に支援をお願いしましたが、全部が断りの返事でした。これらは今もとても非常に残念な思いがします。

私とその混乱の中でしたことは、医師だけでなくコメディカルや事務系も含めて医療集団とし、総力を挙げて地域住民に医療を提供することと、これ以上の退職者を出さないため、特に医師や看護師の疲弊を防ぐために、他のコメディカルを増やし支える環境作りをしたことだったように思います。現在、大学からの派遣医師はおらず、勤務している医師はほぼ全員が永久就職者です。このことは、大学等の引き上げをこれ以上心配しなくて済み、精神的には幸せな状況といえるかもしれません。そして、最近になり、地元出身の医師の永久就職とともに、自治医

大や北里大学の派遣にメドが付き、数年間に渡って続いた悪夢はやっと過ぎさってくれるようにみえます。

ところで、話は変わりますが、独立行政法人化した群馬大学が、第一義的に、一般の会社のように利益を追求せざるを得なくなったことや、新研修制度の結果、医局という「上下関係と集団社会」という体験を積まない医師が誕生してきたことは、私のいた時代とは全く別な時代へのトリップのように思います。私は時々大学に行きますが、廊下ですれ違う若い医師は、視線も合わせず、他に興味がなさそうな様子で、異星人か発達障害の患者さんのように見えますし、病院自体も何か冷え冷えした感じがします。私は多分浦島太郎状態なのでしょう。

さて、私の勤務していた時代を考えると、患者さんだけでなく、医師や医療従事者の多くが大学病に感染していたように思います。大学が一番良いという一種の妄想です。しかし、最近の研修医は大学病に罹らない点では良いと思いますが、代わりに東京病ないし都会病に罹っているようです。しかし、大学病も都会病も熱病の一つに代わりありません。有効な治療薬は多分ありませんが、いつかは熱が冷め、自然に治癒する気がします。今でも、多くの患者さんとともに医師達は大学病や都会病に罹り、形だけの大きな建物や場所を信じているようですが、そろそろその異常さに気づき始めているのではないのでしょうか。

今私が勤めている病院は、医師不足・看護師不足の中で職員の意識が変わり、大変身しました。病院のモットーは、患者さん一人一人を大切にすること、そして在宅も含めて一貫した医療内容を提供することですが、これは、患者さんがいてこそ医師が存在することの実践と考えています。そして、現在もっとも重要と思うのは、職員一人一人を大切にすること環境作りだと思います。私が精神科医だから言うのではありません。多種職が協働し、帰属意識と一体感を持って働く職場であって、患者さん一人一人と同様に、職員一人一人も大切にされる職場の環境作りだと思うのです。

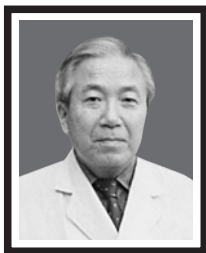
ですから、私が母校に望むもの、それは昔への単なる懐古趣味ではありません。外から垣間見る限り、大学はばらばらで、自分勝手に、かつ個人的な利害を追い求めるような職場になっているように見えます。この状況をもう一度作り直し、ないし作り替えてほしいのです。そして、以前のように若い医師や看護師などの職員が多く集まる群大に戻してほしいというのが私の唯一の願いです。

なお、近くにお越しの際は、お立ち寄り下さい。是非私たちの病院も見てくださいと思います。

追悼

古川 研 先生を偲ぶ

医学部同窓会・刀城クラブ
元会長 饗場 庄一(昭31卒)



古川名誉教授には残念なことにご逝去なさいました。前橋市斎場には多くの名誉教授の先生方・大学関係者・法医学教室関係者等による法要が盛大に営まれました。高田大学長の弔辞は都合で小湊現教授が代読、同窓会を代表して私が、そして法医学教室関係者の代表として岸前教授がそれぞれ奉読致しました。改めてご霊前での私の弔辞を記して先生のご冥福を祈りたいと思います。

野山の木々は鮮やかな紅葉で色づき、間もなく赤城おろしの空っ風に落ち葉が舞う季節を迎えます。こんなときに群馬大学名誉教授の古川研先生は忽然として黄泉の国へ旅立たれてしまいました。残念でなりません。古川先生は群馬大学医学部になってからの第一回生であり、私は一年後輩の二回生であります。私たちが入学した頃は、木造の医学部玄関には前橋医学専門学校と前橋医科大学と群馬大学医学部の三枚の看板が下がっていた頃でした。

先生は昭和30年3月に卒業されて母校でインターン研修のあと井関教授の法医学教室に入られました。昭和20年の後半には群馬大学医学部は大学院の設置に奔走しており、第二内科・第二外科・第二解剖などの教室の設置が急がれておりました。第二外科教室は東大から澁澤教授以下助教授・講師・助手・婦長さんに至るまで赴任してきて、激しい研究が始まっておりました。群馬大学関係者が居ませんでしたので、勤められるままに私たち学部三年生の仲間3人はその情熱にほだされて教室の研究の手伝いを始めておりました。

程なくして大学の中では基礎の井関先生の法医学教室の研究室、臨床では澁澤外科の研究室は夜の明かりが消えるときがないとまで噂されておりました。井関先生は二度も学士院賞に輝いておりましたが、その第一回は細菌の遺伝に関する研究であり、第二回はABO式血液型の変換に関する研究でありました。この研究には古川先生の研究が大いに関係していたとも聞きましたが、先生が教授になられてからも研究の成果は益々輝きました。その他、沼田の迦葉山付近の赤軍派関係の死体の検案や520名が亡くなされた中、奇跡的に生存して私がヘリコプターで4名を救出してきたあの御巢鷹山での日航機遭難の際、遺体の法医学的な個人識別の仕事など警察に対する大きな功績も忘れられません。

また私が医学部同窓会長になりました際の医学部五十周年記念事業として同窓会館の増改築を提案したときの思い出があります。経済状況が必ずしもよろしくありませんで、同窓会員に寄附を求めても目標額はとても集まらないといった意見が多くて、同窓会の会報に何度も檄を書きたてたり、アンケートを試みたりして意見の集約を試みていたときに十分な目標額が集まらないなら記念となる時計塔を建設したらとの案を出して下さったのが古川先生でした。結局私の個人的関係から大蔵省や国税局の働きかけが成功して、免税措置を講ずることができて現在使用している同窓会館の増改築とすることができました。

また、私が先生のご家族さまとも深い関係を持つようになりましたのは、先生が退官された後からでした。それは平成16年5月7日のゴールデンウィーク中での突発的出来事からでした。朝8時半でした。奥様から今まで電話など頂いたことはなかったのですが、主人が突然意識が無くなったので熊谷市内の二箇所の病院へ電話をしても休みだそうです。主人は在職中、脳梗塞を煩ってからワーハリンの内服をしていたのですが、どうしたらいいでしょうとのことでした。それは大変ですから、救急車を自宅へ手配しますので、深谷赤十字病院で会いましょうと約束して、私も直ぐに車で出かけました。出かけに深谷日赤の和田脳外科部長は前橋から移動した先生でしたので連絡したのですが、自宅はゴールデンウィークのためでしょう、困ったことに電話がでませんでした。救急外来で先生の血圧は200もありまして意識は全くありません。当直医は群大整形外科の荒先生でしたが彼の学生時代の法医学の教授はもう古川先生ではなかった由でした。降圧剤を使用しながら、診察してくれました。脳外科の部長は不在のようすし、前橋日赤には現在脳外科の医者は二人いるので、検査の結果必要なら手術の対応はできますとの返事でしたが、防災ヘリを呼んで搬送したらどうでしょうかと相談しますと、当直医は是非お願いしますという結論となりました。ここは埼玉県ですので、群馬県防災航空隊に電話して埼玉県航空隊の電話を聞いて出動を要請しました。深谷日赤のヘリポートはこの年の1月7日に院長さん、事務部長さんの案内で見せていただいておりますので、初使用となってしまいましたのでこれは後日、深谷日赤の院長さん・事務部長さんに詫言を送った次第でした。前橋日赤の屋上ヘリポートには11時15分に到着、直ちに検査の結果は巨大な硬膜下血腫と診断されました。生命救助のためには危険は伴うがとの説明のもと、2時から手術開始となりました。救命できたものの、経口摂取が可能になるまで後日外科で胃の造設も行いました。長期間のリハビリが必

要となり、8月12日に高崎の日高病院に転院となりました。その後も老年病研究所のリハビリに転院など奥様のご苦勞の毎日となりました。その後、自宅に手を加えて車椅子で洗面所へ移動できるまでにはなりました。そして闘病生活のご苦勞の5年がありました。先日の11月7日奥様の介助の車椅子で叙勲の伝達式に参列、そして宮中へ参内して陛下の拝謁に浴すなど先生は勿論ですが、奥様はじめご家族さま方のご苦勞の5年間は報われたかに見えませんでした。しかし丁度連休の11月24日夜6時25分、奥様からの電話で呼吸が止まってしまいました。前日から熱がありました、とのことでした。できることなら私にも病院にきて欲しいとお話でしたので、救急車を追って病院に伺いました。

自宅へ帰られてからは私たち熊高の仲間でありまず関東脳神経外科病院の清水院長はじめ名誉院長になっておられる麻酔科の藤田名誉教授など多くの方々のお世話になりながら、リハビリに努めてこられました。救急隊が自宅に到着したときには既に脈は触知出来なかったとのことでした。6時50分ご逝去でした。

病院の救急外来の診察室での先生のお顔は本当に安らかでした。先生、長い間、闘病生活本当にご苦勞さまでした。どうぞこれからは安らかにお休み下さい。そして永い間、介護にご苦勞されました奥様はじめご家族様を天国からお守り下さい。

ご冥福を祈念申し上げます。さようなら。合 掌

平敷淳子先生講演会(同窓会補助)

福水 裕子 (平22卒)

2009年12月18日(金)平敷淳子先生をお招きし講演会を開催致しましたのでここにご報告致します。

平敷先生は1964年東京女子医科大学卒業後、66～70年ジョーンズ・ホプキンス病院放射線科レジデント、70年より群馬大放射線科助手、72年よりジョーンズ・ホプキンス病院放射線科助教授、74～87年群馬大放射線科助教授を経て、87～2006年埼玉医大放射線科主任教授を歴任されました。現在埼玉医科大学名誉教授、国際女医会会長(会員人数約10万人)を務められ、世界中でご活躍されている先生でいらっしゃいます。またお二人の娘さんがいらっしゃいます。今回平敷先生をお招き致したのは、キャリアを積みつつ子育てやご家庭の生活

を両立された平敷先生のお話から私達が教えていただき学べることがあると確信したからであります。女性医師のみならず、医師のロールモデルともいえる平敷先生のお話は私達のこれから先の人生のヒントや示唆となるものでした。

演題は「一生輝いて、働いていくために」～leadership, achievement and accomplishment～でした。医師という職業は1. Learned Profession (修得された知的職業) 2. Mission (使命感) 3. Compassion (感性豊かでいとおしむ心のある人間性)であることや、医師として必要なLeadershipの5つの条件に“C”Care, Character, Composure, Comprehensive, Courageをご提唱いただきました。私達学生には「一歩前へ！自分を信じて歩む。」という心強いメッセージも送っていただきました。講演には50人以上の学生や先生方の参加があり、参加した学生からは勇気付けられた、参考になることをたくさん聞くことが出来たなどたくさんの反響をいただきました。



(平成21年12月18日, 臨床講堂にて)

最後にこの講演会を開催するに当たって、ご後援いただきました同窓会会長でいらっしゃいます森川昭廣先生をはじめとする関係者の皆様、平敷先生をご紹介いただきました放射線診断核医学・画像診療部准教授でいらっしゃいます天沼誠先生に心より感謝申し上げます。



女性医師シリーズ 29

スウェーデン留学を通して

Karolinska Institute, Division of Renal Medicine and Baxter Novum

山本 多恵 (平9卒)

スウェーデンと聞いて、どんなことを思い浮かべますか。オーロラや白夜の国、シンプルで美しい北欧家具やデザイン、それとも高い福祉制度でしょうか。北欧をテーマにした日本の雑誌などを読むと、美化され過ぎているように思う反面、2歳と4歳になる娘を連れての留学生活を通して、期待以上に充実した保育制度を実感しています。1歳以上の子供は必ず保育園に入ることができ、料金も良心的です。16歳まで続く児童手当は2児目からは増額され、子供が増えるごとに年間の休暇が増える制度や、出産後には約1年半の有給休暇（両親どちらが取ってもよく、父親も最低1ヶ月休暇する義務がある）などが挙げられます。同僚の男性が突然半年の育児休暇に入った時には驚きましたが、保育園の送り迎えをする父親やベビーカーを押す若い男性の姿が当たり前であり、男性も普通に育児に参加し、子供がいれば予期せぬ事態が起こりうることを制度として保障しているのです。こうした保育環境に後押しされるように、子育て中の女性もどんどんキャリアを積んでおり、専業主婦という方にはまずお目にかかれません。

現在、群馬大学医学部では女子学生が半数を占めていると聞きます。学生生活を送る上では男女平等ということでしょうか。しかし、群馬大学で女性医師支援プログラムが設けられ、このような会報に女医が取りあげられることを考えると、まだまだ男女差は残っているのでしょうか。それでも、次々と増えている女性支援システムは大変な難く、私自身も、学術振興会が出産育児後の復帰支援目的に設けた特別研究員(RPD)に選ばれたことが留学のきっかけとなりました。私は旧第三内科で研修後、筑波大学の基礎医学で学位を取得しました。研究の魅力以上に、遅れてしまった医療技術への焦りから臨床生活を再開したものの、出産時期と

重なったこともあり、思うように医療に携わることができずにいました。そんな折、RPD制度が始まることを知り、生体統御内科学野島教授の寛大な配慮に再三お世話になり、受入教官になって頂いた上で、後半の海外研修を認めて頂きました。こうして、夫の留学に付随して、受入研究室を探し、現在に至ります。ここカロリンスカ研究所は、創立200年を迎えるスウェーデン最大の医科単科大学で、ノーベル賞・医学生理学部門の選考委員会があることでも知られます。研究所内での受賞者の講演に参加したり、晩餐会の報道を拝見したりと、独特な経験も楽しめました。職場では、帰宅が少し遅くなると「早く子供を迎えに行け」と言われるほど理解があり、女性であることや育児に伴うハンデキャップをほとんど感じずに過ごしています。小さい子供を抱えたこの時期を、ワーキングマザーにとって理想的ともいえる環境で過ごせたことは、幸運であったと感じております。

私の周りの同級生を見渡してみると、大学で医局長や指導医、関連病院の部長、開業や研究など目覚ましく活躍している働き盛りの男性陣に比べて、女性陣は実に多彩な選択をしています。結婚や子供の有無にかかわらず、男性にも負けず仕事に励む人もいれば、夫にあわせて生活を変えたり、職を離れている人もいます。結婚や出産が転機となることも多いのですが、それでも試行錯誤の末に、皆自分の好きな道を選んでいるようです。実際に、父親の育児休暇中は母親が夜泣きにも起きないというスウェーデン事情を目の当たりにすると、行き過ぎているようにも感じ、男女平等を実行するのは難しいと思いました。しかし、やりたいことを諦めず、どのような形であれ仕事を継続することで、次の機会が開けるのではないかと考えています。長寿国日本の平均寿命は男性78歳、女性85歳と言われます。長生きの分だけ社会に貢献できる機会が増えるとしたら、一時的なペースダウンにもさほど引け目を感じなくてもいいかもしれません。働くことを余儀なく期待される男性陣に対して、働くペースを選べるうえ、女性支援システムなども利用できるとしたら、女医であることはむしろ特権と言えるかもしれません。

最後になりましたが、このような身に余る寄稿の機会を頂き有り難うございました。この場をお借りしまして、ここまで温かく御指導下さった諸先生方に感謝します。そして今よりも陰しかったであろう道を開いて下さった先輩女医先生方、また現場で受入れ体制に尽力下さっている先生方に感謝いたします。

臨床研修センター便り ⑫

～シニアレジデント制度 (後期研修プログラム) ⑧～

医学部附属病院臨床研修センター

副センター長 大山 良雄(昭63卒)

1) はじめに

平成21年12月に厚生労働省から発表されたデータによりますと、群馬県内の医師数(総数)は、平成18年が4,216名、平成20年が4,187名と、この2年間で29名減っています。全国で、この期間に医師数が減った都道府県は僅かに3県で、減少した人数は群馬県が一番多いという驚くべき結果でした。このような極めて危惧される状況の中で、群馬県の地域医療再生計画に基づき、平成22～25年度の4年間にわたり、群馬大学医学部附属病院に寄附研究部門が設置されることが決まりました。地域医療を担う医療人の育成と地域医療を守る医師派遣システムの構築が、寄附研究部門の主な目的です。群馬県の寄附研究部門が群馬大学に設置されることにより、群馬県と群馬大学が一体となって、地域医療の充実に取り組む体制が整ったとも言えます。群馬県の危機的状況を打破するためには、この寄附研究部門を積極的に活用して、県内の医療関係者が一丸となった対策を立てる必要があります。臨床研修センターは、初期研修医および後期研修医(シニアレジデント)の研修を管理する部門ですが、新たに設置される寄附研究部門と連携を密にして、今後、地域医療の魅力を実感できる研修プログラムを若手医師に提供したいと考えています。ぜひ、同窓や同門の先生方のご協力をお願い申し上げます。

それでは、当院の後期研修(シニアレジデント)プログラムの中から、今回は、当院の第一内科および核医学・画像診断部の後期研修プログラムを紹介させていただきます。

2) 第一内科後期研修プログラム

第一内科では、3年目からのシニアレジデントの期間に内科臨床医としての技術を向上させて、日本内科学会認定内科医の取得を目指します。それに加えて第一内科の専門領域である内分泌・糖尿病代謝、呼吸器アレルギー、消化器、肝臓の専門分野を修得できるように指導を行っていきます。第一内科の最大の特徴は、豊富な人材と関連病院です。医局員の数は国内外への留学者・産休育休中の医師などを含めると240余名(実働160名)、県内の主要な病院を関連病院としています(しかし、それでも関連病院からの医師派遣要請は強く、医会員が不足しているのが現状です)。県内の日本内科学会認定教育病院および教育関連病院には、すべて第一内科出身の指導医が勤務しており、専門臨床医学の研鑽が十分可能なように指導します。一般内科研修終了後、日本内

科学会認定内科医を取得します。その後は各自希望の専門分野の研修コースに進み、研修とともに各種特殊技術を身につけ研鑽します。3～5年後、日本内科学会認定専門医の他、以下に示す各学会認定専門医の資格が取得できるようになります。また、2年次から学位取得コース(大学院コース)の選択も可能です。病院に勤務しながら各研究室に所属し、研究や海外留学をすることも可能です。

<取得を目指す専門医名>

日本内分泌学会専門医、日本糖尿病学会専門医、日本呼吸器学会専門医、日本アレルギー学会専門医、日本呼吸器内視鏡学会専門医、日本消化器病学会専門医、日本消化器内視鏡学会専門医、日本肝臓学会専門医

<専門医を取得までのおよその研修期間>

後期研修1年次：大学あるいは関連病院で研修

後期研修2年次：日本内科学会認定内科医取得(最短の場合)

後期研修3年次から：大学あるいは関連病院で研修

後期研修4年次：日本内分泌学会専門医、日本糖尿病学会専門医(最短の場合)

後期研修5～6年次：日本呼吸器学会専門医、日本アレルギー学会専門医、日本呼吸器内視鏡学会専門医、日本消化器病学会専門医、日本消化器内視鏡学会専門医、日本肝臓学会専門医

<学会の研修施設として認定を受けている関連病院名>

前橋赤十字病院：日本内科学会認定教育病院、日本糖尿病学会認定指導病院、日本内分泌学会認定指導病院、日本呼吸器学会認定指導病院、日本呼吸器内視鏡学会認定指導病院、日本消化器病学会認定指導病院、日本消化器内視鏡学会認定指導病院、日本肝臓学会認定指導病院

伊勢崎市民病院：日本内科学会認定教育病院、日本呼吸器学会認定指導病院、日本アレルギー学会認定指導病院、日本消化器病学会認定指導病院、日本消化器内視鏡学会認定指導病院、日本消化器がん検診学会認定指導病院

桐生厚生総合病院：日本内科学会認定教育関連病院、日本呼吸器学会認定指導病院、日本呼吸器内視鏡学会認定指導病院、日本消化器内視鏡学会認定指導病院

済生会前橋病院：日本内科学会認定教育関連病院、日本消化器病学会認定指導病院、日本消化器内視鏡学会認定指導病院、日本消化器がん検診学会認定指導病院

公立富岡総合病院：日本内科学会認定教育関連病院、日本糖尿病学会認定指導病院、日本呼吸器学会認定指導病院、日本アレルギー学会認定指導病院、日本消化器病学会認定指導病院

原町赤十字病院：日本内科学会認定教育関連病院、日本消化器病学会認定指導病院、日本肝臓学会認定指導病院、日本消化器内視鏡学会認定指導病院

(次頁へ続く)

(前頁から)

国立病院機構沼田病院：日本内科学会認定教育関連病院、日本呼吸器学会認定指導病院、東邦病院：日本内科学会認定教育関連病院、日本消化器内視鏡学会認定指導病院

国立病院機構西群馬病院：日本内科学会認定教育関連病院、日本呼吸器学会認定指導病院、日本呼吸器内視鏡学会認定指導病院

3) 核医学・画像診療部後期研修プログラム

核医学・画像診療部の研修では、放射線診断専門医、核医学専門医、インターベンショナルラジオロジー（IVR）専門医を目指すプログラムであり、エックス線CT、MRI、核医学検査（SPECT、PET）、超音波検査などの画像診断の研修を行う。それとともに病棟では、IVR、RI内用療法（核医学治療）などの治療を受ける症例の担当となり病棟業務も行なう。放射線科専門医は麻酔科専門医とともに最も歴史の古い専門医だが、他の学会専門医と同じように、放射線科専門医制度も変わりつつあり、新制度では放射線診断専門医と放射線治療専門医に完全に分かれるようになった。放射線診断専門医と放射線治療専門医をふたつ所持することはできない。後期研修2年終了後さらに修練し、医学部卒業5年経過して放射線科専門医を、さらに2年間修練して放射線診断専門医を取得できるプログラムである。後期研修は原則として大学病院を中心に行うが、一般的な病気の画像診断を学ぶために関連病院でも研修する。後期研修2年終了時に大学院に入学し、4年後に学位（医学博士）を取得する。

<取得を目指す専門医名>

放射線診断専門医資格、放射線科専門医。さらに核医学専門医、IVR専門医、PET認定医、超音波専門医などの専門医資格も取得可能である。

<専門医を取得するまでのおよその研修期間

および研修施設>

後期研修1年次：大学病院で画像診断の研修を行うとともに、北6階にある病棟にてIVR、RI内用療法を行う症例を担当する。

後期研修2年次：大学病院ないしは関連病院で研修する。

後期研修3年次：関連病院で研修する。終了後、放射線科専門医を取得する。

後期研修4年次：大学病院あるいは関連病院で研修。放射線科専門医に合格した後、さらに2年間修練し、放射線診断専門医を取得する。この間に核医学専門医、IVR専門医、PET認定医、超音波専門医を取得することができる。

<学会の研修施設として認定を受けている関連病院名>

後期研修可能な関連病院は県内が主で、社会保険群馬中央総合病院、伊勢崎市民病院、群馬県立がんセンター、済生会前橋病院、前橋赤十字病院、富岡総合病院、総合太田病院などが専門医修練機関である。

学会報告（同窓会補助）

第35回日本整形外科学会 スポーツ医学会 学術集会を終えて



整形外科学

教授 高岸 憲二（特別会員）

平成21年9月25、26日にベイシア文化ホールおよび前橋商工会議所会館において開催されました第35回日本整形外科学会スポーツ医学会学術集会が盛会裡に閉会しましたことを皆様にご報告いたします。これもひとえに森川昭廣会長をはじめとした群馬大学医学部同窓会の皆様の暖かいご支援があったおかげと心から感謝申し上げます。

当初、日本整形外科学会スポーツ医学会会員の利便性を考えてパシフィコ横浜で開催する予定にしていたが、1) 前橋市の地価が県庁所在地で全国一安価となり、この10年間の前橋市内の衰退を身近に感じるほどになっていること、2) 群馬大学の卒業生を含めて群馬県に残る医師が次第に少なくなってきたこと、3) 2年後の日本整形外科学会基礎学術集会が前橋市内で予定されてその予行演習と位置づけられる、ことなどから前年10月学会理事長や主だった方々のご了承を得て前橋市に変更しました。新型インフルエンザの流行・国体と期日が重なったことや前橋市で行うと東京都内に比べて参加が2-3割減ることを聞いておりましたが最終的には700名を越す参加者がありました。群馬大学医学部同窓の皆様も多くの先生に参加いただき、盛り立てていただきました。

今回の学会ではなるべく群馬のものを前面に出そうと懇親会における群馬県の地産地消、学会を取り仕切る会社も群馬県の子会社、講演・シンポジウム・パネルディスカッションなどできる限り群馬大学整形外科学会関係や群馬県の人を入れました。あまりに群馬県を意識しすぎたため、行き過ぎたことも目に付きました。

投球障害肩の患者数人に参加していただき、招待講演者のKibler先生や日本のプロ野球選手を多く診察している整形外科医と理学療法士による、診察・治療のデモンストレーション及びザスパ草津の植木ジェネラルマネージャーによる市民公開講座などの企画ができましたのも群馬大学医学部同窓会をはじめ多くの方々からご寄付をいただき、当教室の小林勉君を中心とした教室員が学会前に入念に準備してくれたおかげです。予想以上の参加者があったにもかかわらず参加者から「今度の学会は学問的にも優れていて得るところが多く、満足のいく学会でした。」とのお言葉や礼状を多くいただきましたことは教室員が学会を真剣に手伝ってくれたおかげと考えております。ありがとうございました。

医学部代表者及び 新任教授との合同 懇談会について



幹事長 岡田 恭典 (平3卒)

このたび、小和瀬貴律先生から幹事長を引き継ぎました小児科の岡田恭典（おかだやすのり）です。よろしくお願ひ致します。

さて、毎年恒例となりました医学部代表者及び新任教授との懇談会を2月26日（金）石井ホールに於いて開催いたしました。開催の趣旨は、群馬大学医学部同窓会・刀城クラブの活動（財団法人群馬健康医学振興会の活動）を代表者の先生方及び新任の教授の先生方にご理解いただき、群馬大学、同医学部の活動の中で、同窓会（財団）の役割等について意見交換することにあります。

合同懇談会には、群馬大学の代表として高田邦昭学長、和泉孝志副学長、医学部代表として星野洪郎大学院医学系研究科長（医学部長）にご出席いただき、医学部新任教授は、小山徹也教授（病理診断学）、久枝一教授（国際寄生虫病学）のお二人の先生にご出席いただきました。

同窓会からは、森川昭廣会長、西松輝高副会長、田村遵一副会長、成田忠雄副会長代理、饗場庄一顧

間、山中英壽財団理事長（前会長）が出席いたしました。

合同懇談会は、はじめに森川会長から同窓会の活動について挨拶があり、続いて、高田学長、星野研究科長（医学部長）から群馬大学及び医学部の将来と展望についてのお話をいただき、山中理事長の乾杯の発声で本会は大いに盛り上がりました。さらに、小山教授、久枝教授から新任教授の抱負などについてお話を伺うことができました。

また、和泉副学長（重粒子線医学推進機構長）から、世界最先端装置である重粒子線治療施設に関する近況のお話を聞くことができました。

予定の時間を超えるほどの意見交換がなされ、十分同窓会（財団）との相互理解が進んだ有意義な会にすることができました。



（平成22年2月26日、石井ホールにて）

同窓会会員名簿発刊される

平成21年度版の会員名簿が発刊されました。平成17年に個人情報保護法が施行され、個人情報の取り扱いには十分な注意が必要とされています。同窓会会員名簿は掲載内容や配布方法などについて慎重に検討を重ねて作製され、正確な内容と使いやすさを第一の目標として編集されました。名簿作製における会員の先生方のご協力に心から御礼申し上げます。

昨年7月に、会員の先生方に名簿の掲載内容についての調査票をお送りいたしました。このときご購入の予約をいただいた先生方には既に名簿がお手元に届いていると思います。事務局にはまだ名簿の残部がありますので、ご希望の先生方にお届けすることができます。ご希望の先生はメールあるいはFAXで事務局までご連絡ください。

平成21年度版 同窓会会員名簿編集委員長
萩原治夫（昭56年卒）

群馬大学医学部

同窓会会員名簿

平成21年度版



2010

群馬大学医学部同窓会
刀城クラブ

「重粒子線、切らずに治すがん治療と医療最前線」発刊のお知らせ

(財)群馬健康医学振興会
群馬大学医学部同窓会・刀城クラブ編

編集委員

中島 孝(昭49卒)・白倉賢二(昭50卒)

本年4月から稼働体制に入る群馬大学重粒子線治療を正確な最新の医療情報として、同窓会会員、県民、さらには日本の皆様にお知らせすべく、本書が発刊されることになりました。この本は、これまで財団法人群馬健康医学振興会が群馬大学医学部同窓会刀城クラブと協賛の形で出版してきた「主治医のアドバイス」の続編となるものです。同窓会会員の中には、この「主治医のアドバイス」の執筆をされた方や診療所等で販売にご協力くださった方も多いためです。これまでのご協力に感謝いたします。しかし、世の中には既に多くの同じような医学解説書が出版されており、これまでの様に「主治医のアドバイス」を継続して出版するよりは、日本で最初の小型医療用重粒子線治療施設の本格稼働を記念して、また、今後成功裏に運用するためにも、この新しい癌治療法の詳細を多くの方々にお知らせすることの方が、群馬大学医学部同窓会における社会的使命が大きいと考えた次第です。群馬大学で始まるようとしている新しい癌治療法を是非成功させ、日本全国に、さらにアジア・世界に広げて行くためにも皆様の関心とご協力をお願いいたします。

目次を見ていただけるとお分かりと思いますが、第I章が重粒子線治療の紹介です。重粒子線とは何か、これまでの放射線治療とどのように違うのか、どんな癌に有効なのか、等、治療の内容についても解説いたしました。また、群馬大学における重粒子線治療施設の設置経緯についても記載してありますので、同窓会会員始め、その関係者の方々は誇りを持って、周りの方々へ重粒子線治療についてお知らせして頂ければ幸いです。第II章は、最新の医学情報が詰まっております。特に、群馬県民や群馬県近郊の方々にとっては、近くにこのような専門医の存在を知ることができ、大変心強いことではないかと思えます。さらに第III章では、社会医療と福祉の現状について紹介しております。高齢化社会に突入した日本では、今後このような社会医療や福祉の充実が欠かせません。社会医療の仕組みや福祉の現状を十分に理解して活用することが、これからの社会を生きて行くためには必要不可欠です。

この本の執筆者は同窓会会員を中心に、その専門として活躍されている先生方です。是非、この本を購入され、活用頂ければ編集担当者としては本望です。この本は上毛新聞社が一般の書店でも近々販売する予定となっておりますが、同窓会事務局からも会員割引で、直接購入することができます。購入方法は17ページの通りですので、多くの方の申し込みをお待ちしております。

目 次

発刊によせて

財団法人群馬健康医学振興会

理事長 山中 英壽

群馬大学医学部同窓会・刀城クラブ

会 長 森川 昭廣

- 3 粒子線治療の歩みと現状
- 4 重粒子線治療装置のすべて
- 5 ここまできた重粒子線治療のすべて
- 6 群馬大学の重粒子線治療施設の設置経緯とその施設紹介
- 7 重粒子線治療Q&A

第 I 章

切らずに治すがん治療

— 重粒子線治療 —

- 1 3人に1人はがんで亡くなる時代を生きる
- 2 がんの放射線治療の歴史、過去、現在、未来

第 II 章

病気の診断と治療の最前線

- 1 脳梗塞
- 2 脳出血とクモ膜下出血
- 3 脳腫瘍—手術の進歩

- 4 がん患者に併発するうつ病と自死予防
- 5 認知症の診断と治療
- 6 パーキンソン病
- 7 硝子体疾患
- 8 重度感音難聴に対する最先端難聴治療－人工内耳について－
- 9 顎変形症
- 10 心筋梗塞
- 11 不整脈とカテーテルアブレーション(カテーテル心筋焼灼術)
- 12 高血圧症－最近の進歩
- 13 動脈硬化症と脂質異常
- 14 糖尿病 食事療法から自己インスリン注射まで
- 15 メタボリックシンドローム
- 16 肥満外科治療
- 17 インフルエンザ
- 18 気管支喘息 (小児喘息を中心に) 薬剤治療
- 19 COPD予防とりハビリ
- 20 関節リウマチ
- 21 慢性腎臓病
- 22 人工透析と腎移植
- 23 人工関節
- 24 腰部脊柱管狭窄の治療

- 25 不妊治療
- 26 アトピー性皮膚炎
- 27 疼痛性疾患 (痛みの病気)
- 28 乳がん
- 29 呼吸器外科手術の進歩と肺がん
- 30 食道がん
- 31 胃がん (内科治療)
- 32 胃がん (外科治療)
- 33 大腸がん
- 34 肝がん－ラジオ波療法
- 35 子宮頸がん
- 36 前立腺肥大症と前立腺がん
- 37 血液のがん (白血病と悪性リンパ腫)

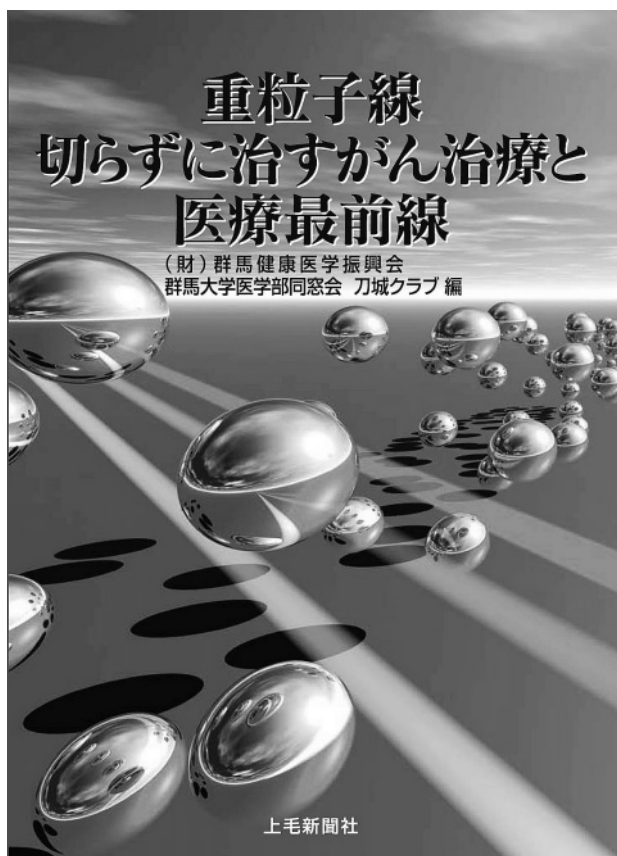
第 Ⅲ 章

社会医療と福祉の現状

- 1 救急医療体制の現状と課題
- 2 急性期のリハビリテーション
- 3 回復期のリハビリテーション(回復期リハビリテーション病棟)
- 4 維持期リハビリテーションと介護・医療
- 5 地域リハビリテーション
- 6 福祉と療育 (障害を持った小児を中心として)
- 7 地域医療連携
- 8 がん拠点病院の役割
- 9 緩和ケア病棟
- 10 在宅がん緩和医療

【申込方法】

- 代金：定価2,000円、同窓会会員は1,500円 (送料及び代引手数料別途)
- 下記のいずれかをお願いします。
- ①ハガキ 〒371-8511 前橋市昭和町3-39-22 群馬大学医学部同窓会宛 に葉書で申し込む。
- ②メール (tojoclub@showa.gunma-u.ac.jp) で同窓会事務局に申し込む。
- ③電話 (027-220-7861) で直接同窓会事務局に申し込む。
- 代金支払い方法
代引の宅急便でお送りします。宅配担当者に直接お支払い下さい。



支 部 だ よ り

群馬大学医学部同窓会・ 福島県支部スタート

後藤 文夫 (昭42卒)
吉田 初雄 (昭47卒)

2009年11月28日、郡山駅前のビューホテルアネックスにおいて、第一回支部会が開催されました。参加者は、当初 10名以上の予定でしたが、急用や体調を崩した会員もあり、8名の参加となりました。福島県は群馬県のほぼ2倍の面積であり、東西200km以上と離れているため、会場の選択に苦労します。

まず会則の検討と役員を選出を行い、支部長（後藤文夫；昭42卒）、副支部長（吉田初雄；昭47卒、竹之下誠一；昭50卒）等が決まりました。続いて、全員の自己紹介と活動状況が報告され、竹之下教授（福島県立医大病院長）からは、福島医大の活動状況、特に寄付講座の拡充、産学連携による研究推進と高額研究費の獲得など、幅広い分野での活躍が報告されました。また、開業している会員からは、高齢化社会に向けた認知症対策などの社会貢献活動が

報告されました。懇親会は、和室でくつろぎながらの談笑となり、福島県の医療、医師不足問題、民主党政権の課題などが話題になったようです。最後に、後藤が会員の要望を受け、群馬大学の現況、特に入試を含む教育体制の変化、研究費関連の現況、重粒子線治療施設の建設状況（中野教授にいただいたスライド使用）などを報告しました。（文責；後藤文夫、福島県社会福祉事業団参事・太陽の国病院長）

後藤会員は、Power Pointを用いて群大の現状について説明し、科学研究費関係では岡山大学と比較し、様々な項目を数値化して示したので、アカデミックな雰囲気の中で全員が聞き入っていました。また、自著「漱石と子規の病を読む」を全員に配られ、次会には執筆に係るエピソードなどをお聞かせ願えればと思います。本会の次回開催は、会員によるミニレクチャー（専門・雑学・現況報告など）により交流をはかり、翌日はゴルフで汗を流しながら懇親を深めようということで一致し、吉田と松枝(昭53卒)が担当することになりました。

文責；吉田初雄（今泉西病院院長）

【福島県支部規約】

第1章 総 則

第1条 本支部は、群馬大学医学部同窓会（刀城ク



第一回福島県支部会（平成21年11月28日、郡山市ビューホテルアネックスにて）

ラブ) 会則に基づき、群馬大学医学部同窓会福島県支部と称する。

第2条 本支部は、会員相互の親睦を図り、群馬大学医学部及び医療の発展に寄与する。

第3条 本支部は、原則として1年に1回、支部会及び会員親睦会を開催する。

第4条 支部規約、役員等の改変は、支部会に諮って決定する。

第2章 会員及び役員

第5条 本支部会員は、群馬大学医学部同窓会(刀城クラブ)会則第5条の各号に規定する会員のうち、福島県に居住する者又は福島県内に勤務地がある者とする。

第6条 本支部に次の役員を置き、役員会を設ける。

- (1) 支部長(1名)
- (2) 副支部長(2名以内)
- (3) 会計(1名)
- (4) 監事(2名)

1. 役員は、総務、支部会の企画・運営、会計等を分担し、監事は会計等を監査する。
2. 支部役員の任期は2年とし、再任を妨げない。
ただし、補欠支部役員の任期は、前任者の残任期間とする。
3. 支部長は、支部会を企画する。
4. 支部長は、必要に応じて役員会(電子メール等

による会合も可とする)を招集し、会の運営に必要な事項を審議し、支部会に諮る。

第3章 会計

第7条 本支部の特性上、定額的な会費の徴収は行わない。ただし、懇親会等の会費徴収時に、参加者の同意に基づき、連絡通信費等、支部の運営に必要な経費を計上する。

第4章 雑則

第8条 この規約に定めるもののほか、本支部の運営に必要な事項は、役員会において審議し、支部会に諮って決定する。

附 則

1. 本規約は、平成21年11月28日から施行する。
2. 本支部会において最初に委任される支部役員の任期は、本規定にかかわらず、平成23年3月31日までとする。

【福島支部役員名簿】

| | |
|----------|----------------------------|
| 支部長(1名) | 後藤 文夫(昭42卒) |
| 副支部長(2名) | 吉田 初雄(昭47卒) 竹之下誠一(昭50卒) |
| 会計(1名) | 松枝 久雄(昭53卒) |
| 監事(2名) | 佐藤 和栄(昭57卒) 横川 博英(平8卒) |

大分・福岡合同支部会

中野 眼一(昭41卒)

平成21年12月12日、刀城クラブ大分・福岡支部が大分県宇佐市で開催された。宇佐は全国八幡宮の総本社である宇佐神宮が鎮座し、さらに第二次大戦時、若き兵士達が飛行訓練を行い、太平洋の彼方へと散った宇佐海軍航空隊の跡地がある所でもある。

参加者は先ず宇佐航空隊の跡地や、零戦を収納した数ヶ所の俺体壕を巡り、県立歴史博物館を見学した。

今回は田村遵一同窓会副会長をお招きして、母校の現状をお聞きすることとなった。福岡から産業医大・小林利次(昭33卒)、米良利郎(昭42卒)、福岡大・坂田則行(昭48卒)、九大・壬生隆一(昭51

卒)、杉山大介(平8卒)の各先生、大分から大分大・大橋京一(昭49卒)、県立病院・早野良生(昭54卒)の各先生と小生(昭41卒)と中野由美子(昭41卒)が参加、総勢10名の支部会となった。

小林利次教授の乾杯の御発声で開会、参加者全員の近況報告の後、田村遵一教授より群大の現況につきお話いただいた。宴が酣になるにつれ、母校についての矢継ぎ早の質問や注文に、田村教授も戸惑われる一幕もあったが、同窓生ならではの忌憚のない意見交換で、宴はいやが上にも盛り上がった。

今回は九州の同窓生の母校に対する想いが如何に熱烈であるかを互いに感じとったすばらしい支部会であった。

御多用のところ、遠路本支部会に御出席いただいた田村遵一副会長に心から感謝申し上げたい。来年は米良利郎先生のお世話で、小倉で開催することを約束して散会した。



大分・福岡合同支部会（平成21年12月12日）

第6回中四国地区同窓会

徳島支部 川口 隆（平2卒）

平成21年4月18日、第6回中四国地区同窓会が徳島県鳴門で開催されました。当日は会長 森川先生が中国に御出張のため、前会長 山中先生が学会終了後、予定を変更され、お忙しい中、時間を割いて御出席下さいました。先生より同窓会館の竣工と内部の様子や、同窓会主催の学術活動、交流事業等、

スライドによる御講演を頂き、遠く離れたOB達も母校の思い出を甦らせ、更なる発展を期待して心揺り動かされるものでした。時間の許す限り歓談し、最後にホテル主催の阿波踊りを見物して散会いたしました。普段のDr.同志とは違った同窓生ならではの打ち解けたお話や、今まで知らなかった他医局の情報やクラブ活動今昔等に大笑いしたり、感心させられたりと、大変有意義なものでした。

次回は高知支部主催です。近隣の方とはいわず、遠方からでも家族旅行がてら是非御参加下さい。歓迎いたします。



第6回中四国地区同窓会（平成21年4月18日）

後段：石川、住本、小池、黒岩、高田、高田夫人、芳川、芳川夫人
前段：川口、小池夫人、山中、新居、鶴野、川村、川村夫人（敬称略）

クラス会だより

卒後50周年記念「三三会」

神岡 順次 (昭34卒)

我がクラス三三会は、昭和34年に卒業し50周年を迎えました。卒後毎年クラス会を開催し、もうだいぶ前から11月の第2土曜日と決め、幹事は毎年替わりで前幹事が次期幹事を指名することにしております。

今年は五十嵐俊弥君、斉藤和子君、神岡順次の3名が幹事で11月14日に伊香保でやりましたが、後二者は殆ど添え物といった感じでした。

卒業時61名でしたが今年二人合計13名が鬼籍に入り、48名中29名が参加予定、一人キャンセルがあり28名が伊香保にて旧交を温めました。

四半世紀前のクラス会るとき、普通の色紙の四枚分の大きさ(8号)のものに寄せ書きをしました。そのとき石原恵三・松村龍雄・川合貞郎名誉教授を

招待し、川合先生に「以和為貴」と書いていただきましたが、正に我がクラスのことだと感銘を受けました。今回も同じ大きさのものに寄せ書きをしました。

記念集合写真は、前列左から、大塚浩之・中嶋清雄・白井龍・伊藤琢夫・神岡順次・五十嵐俊弥・齋藤和子・石井綾子・安齋徹男・野上保治・塩崎秀郎、中列左から、青木國幸・大沢伸孝・関口守衛・宮崎英智・中村善寿・満川元亮・乃木道男・山田晴彦・牛尾彰、後列左から、関根貢・山崎統四郎・佐藤祐司・田村璋夫・狩野忠雄・猿谷繁・渡辺脩助・川村豊文です(敬称略)。石井綾子君は、何ん十年振りの参加です。山崎統四郎君以外は皆、後期高齢者になりました。

学生の頃よく歌っていた「古い顔」を野上君のリードで歌い、まるで敷島公園の芝生の上で歌っているような錯覚に陥りました。

我がクラスは、61名中46名(75.4%)がインターン修了後大学に残りました。母校の発展のためには多数の卒業生が大学に残り、鋭い目、大きな心をもって、研究、臨床、教育に携わってゆかねばならないと念じておる今日この頃です。



昭34卒クラス会 (平成21年11月14日, 伊香保温泉ホテル木暮にて)

2009年度 前橋医科大学 第3回卒業生クラス会報告

芹沢 憲一 (昭29卒)

2009年11月8日、上野精養軒で16名の参加で盛会でした。昨年の決定で、「今年を最後のクラス会とする…」と同窓会報にも掲載していただいた為、

昨年を上回る参加となりました。常連の北海道からの金子賢義君をはじめ、卒業以来初めてという福井の加藤君、高崎の阿部君など珍しいメンバーが集まり、50年ぶりの話に花がさきました。最後ということで集まったメンバーでしたが、何とか続けたい…との意見が多く、長年面倒を見てくれた五味渕君から、芹沢が新しい幹事として交代し、本年出席者に限り連絡のはがきを出すことで続けることになり

ました（毎年返事もない人が多いので…）。今までどおり、11月の第二日曜日で、会場は上野精養軒です。正午から午後2時までで、部屋も毎年同じ部屋です。今年は11月14日（日）正午からです。

昨年の参加者と今まで参加の多かった人には通知を出しますが、それ以外の人で参加希望者は、芹沢まで連絡をください。大歓迎です。葉書か、e-mailでご連絡ください。今年は9月10日〆切りです。なお、今年から付添いを兼ねた同伴者の参加も歓迎す

ることになりました。夫婦とは限らず、子供さん、お孫さん、その他どなたでも結構です。会費は同じにいただきますが、そのために例年より、少し安くする方向で考えています。上野公園の中で、駅からも歩いて近いので、是非たくさんの方の参加をお待ちします。

29年卒の皆さん、お元気で…。

(e-mailアドレス：ciao-597@jcom.home.ne.jp
電話は不在が多いと思います)



(平成21年11月8日、上野精養軒にて)

貫井英明君(山梨大学長)退官記念 41会ご苦労さまクラス会

井田 仁一 (昭41卒)

上記、クラス会が貫井君の行跡の良さを示すかの如き、快晴のもと、当初の題名通り行われた。(尚、当日は母上様の看病でお忙しい中、令夫人にも無理を言って特別な計らいで出席いただきました。令夫人にはただただ感謝申し上げます。)

会はクラス会なので、通例の如く、前回のクラス会以降に亡くなった松井君と柳田君に黙祷を捧げ、一般庶務報告後、貫井学長に今までの学長人生の報告を受け、退官後の人生計画や現在も時折、手術に呼ばれOpをしているが、長年鍛えた腕は健在だとのこと、次いで貫井君には記念品、令夫人には花束を贈呈し、記念集合写真を撮り懇親会へと移った。

令夫人も元日航のスケジュールズ、テーブルの回りには花が咲いた如くで、出席者も和やか雰囲気…。酒も大分まわった後、各人それぞれ現況報告やら、今後の人生設計などを話されたが、若い頃と違って景気の良い話もなく、我々も年を取ったものだ実感した。

我々の同級生も貫井君を最後に国立大学に奉職している者は誰も居なくなったが、それにつけても残念なのは、国立大学の学長、医学部長、教授はあまた誕生したが、何と言っても母校たる群大医学部の教授に誰一人としてなれなかったことである。今更次の作戦会議でもないが、我々の頃はまだまだ鉄門の力は強く、立派な人材が居ても教授会で潰されてしまうような情けない時代だったと悔やんでいる。しかし現在の教授会は、母校出身者が何人もおり、母校のためにも良いことだと思っている。一次会で約3時間費やしたが、話題の種はつきず、同ホテル内の別室で、二次会に移り、時間の都合がつく者は

ば全員が出席し学長ご夫妻を中心にさらに話しに花が咲いた。

もうこれで大学に関わる祝い事は無いと思われるので、今度は貫井君が数年後叙勲された時のお祝い

を、各人が夫人同伴で貫井君の地元 湯村温泉（昭和天皇がこよなく愛した常磐荘ホテル）でやろうとけしかけて、クラス会も次の集まりを楽しみに散会となった。



(平成21年11月23日、ホテルメトロポリタン高崎にて)

昭和58年卒クラス会報告

竹原 健 (昭58卒)

平成21年に昭和58年卒業生では2回クラス会が開かれました。我々の学年は、クラス会を3年ごとに開催しておりますが、平成21年4月1日付でクラスの藤本修平先生が東海大学医学部微生物学教室の教授に就任といううれしいニュースが飛び込み、今回の幹事の福島晴夫先生と次回幹事の山田正信先生とが会場の前橋のマーキュリーホテル若狭にて、藤本修平先生の教授就任を祝してクラス会を企画してくれました。平成21年3月28日、会場の前橋マーキュリーホテル若狭には、藤本先生をはじめ、荒川（以下敬称略します）、大和田良一、坂本、猿木、志賀、高田、辻、中沢、中村、西野、野口、服部徳昭、福島、蒔田、山口、山崎恒夫、山田正信、若松、そして、竹原の計20名が集まりました。幹事の福島先生の司会で、教授に就任した藤本先生から、就任

のあいさつと今後の抱負、クラス会への御礼が述べられました。クラス幹事の蒔田先生の乾杯でその後はすっかり、学生時代の戻ったかのような雰囲気になりました。しばらく、歓談が続いた後に、当日の参加者がそれぞれ、藤本先生への祝辞とともに各自の近況報告をしました。

さらに、11月14日（土）にはいつものクラス会が今回幹事の福島晴夫先生と永年幹事のクラス委員蒔田富士雄先生のご尽力のもとに伊香保の森秋旅館にて行われました。参加者は秋山、浅尾、荒川、今村、大和田良一、小田、楮本、甲賀、坂本、猿木、鈴木、高橋正純、谷口、田端、田村（旧姓 塚田）、辻、手塚、得居、中沢、中村、野口、服部徳昭、福島、本庄滋一郎、蒔田、山口、山崎恒夫、山崎雅夫、山田正信、吉永、そして、竹原の計31名です。今年2回目とは言っても、久しぶりに会った旧友との再会に夜更けまで話は尽きませんでした。

翌朝、皆、元気で再会できることを祈念して、その後、恒例のゴルフ班と今回、福島先生による初めての企画として、卒後25年になる母校群馬大学医

学部現在の姿を見学する班とに別れて、森秋を出発しました。

さあ、また3年後に皆元気で再会しましょう。幹事の山田正信先生、次回もよろしくお願いいたします。



(平成21年3月28日、前橋マーキュリーホテルにて)



(平成21年11月14日、伊香保温泉森秋旅館にて)

群大産婦人科 同門ゴルフ愛好会

中村 淳 (昭44卒)

この会は、田村先生、野口先生の努力で始められ、20数年続いている。約10年前にこの会を紹介してありますが、改めて報告します。

1年に1回、年数は離れているが、同じ釜の飯をくった仲間が、現況や産科医不足の問題、少子化の話、教室の将来、リタイア後の婦人科医についてなどを話し合い、翌日ゴルフを通じて親睦を図る会です。例年宇都宮で宿泊し、夜の世界を探訪したが、

そろそろ70の声をきく先生もでてきて、今年よりゴルフ場のロッジに泊まることにした。ロペ倶楽部は昔、ジーンサラゼン主催のジュンクラシック大会のコースで、温泉もあり、紅葉も見事なすばらしいゴルフ場です。毎回新ペリアで順位を争うが田村先生が強い。

メンバーを紹介します。

1. 津久井先生 (昭40卒)

渋川国立を定年後、老健施設で働いており、月に数回はまだ産科の仕事をしている。ご夫妻で山登りをされていたが、最近はおつばら孫の面倒とのこと。ゴルフはこの会のみで、いつもクラブの黴を磨いてくるとのこと。性格の通り、全く素振りなし、球に

当たるから不思議。必ず50台で回ってくる。

2. 野口先生 (昭41卒)

宇都宮で開業中。今年まで6年間栃木県の日母の支部長という大役を勤められた。医局時代から母子保健に熱心に取り組まれていたのを記憶している。この会が永く続いているのも、野口先生の人徳のお陰です。ひょうひょうとしてスコアにこだわらないゴルフです。

3. 田村先生 (昭41卒)

富岡で開業中。一見非力に見えるが、ドライバーの飛距離が最近伸びてきた。プロのレッスンを数年来受けているとのこと。プロの受け売りが得意。ゴルフは頭を使わないからと、60の手習いで囲碁を始められた。考えすぎ、熱中しすぎて最近是不眠とのこと。しかし何事も熱心で今は2～3段の腕前。医局の頃、囲碁くらい頭を使っていれば???と。

4. 阿美先生 (昭43卒)

伊勢崎で開業中で現在もとりあげジジー、2人の息子さんも群大産婦人科医局で活躍中。夫婦でゴルフに夢中でプロに師事し、ラウンドレッスンも。90の壁に挑戦中。奥様も先生と同じく気さくな方で、群大の産科で5人分娩し、子育てしたたくましい方です。

5. 横田先生 (昭44卒)

群馬1、2を争う産婦人科病院の経営者。また生殖医療のエキスパートで、最新の不妊治療を行っている。現在鮎釣りに夢中で週2回は行っている。写真にも凝っており、今までに何回もコンテストに入

選しており、「朝焼けのマッターホルン」「醍醐寺のさくら」は見事。先生に紹介された写真屋に勤められ、僕も何回か応募したが、全くだめ。医局時代からのバイタリティは今も健在。ゴルフも豪快。

6. 中村 (昭44卒)

4年前まで栃木で開業していたが、伊勢崎医師会病院の検診センターにお世話になっている。いろいろ危ない人生を送ってきたが、今は身体が言うことをきかず、今はマラソンと山と旅に夢中です。今年フランスのボルドーでフルマラソンを走った。羅白岳、甲斐駒ヶ岳、燕岳も登った。ゴルフはいつまでたっても100を切れない。

7. 吉田先生 (昭51卒)

現在公立藤岡総合病院の産婦人科部長。医局時代から真面目でまめな先生、今も変わらない。ゴルフはシングル級の腕前で、ロペ倶楽部の名物18番ホールも小さい浮島にドライバーでナイスオン。池越え第二打も180ヤード見事オンし、バーディ。

8. 糸賀先生 (昭50卒)

利根中央病院の産婦人科部長。当時の部長の塩崎先生に刺激サレ、ゴルフにはまる。昔から謙虚な先生で、上の先生はドライバーで越しても、スコアでは越さないをモットウにプレイしているとのこと。塩崎魂も打ち込まれた。

この会が末永く続くことを祈りつつ、また教室の益々の発展を祈っています。健康に感謝し、ゴルフを続けて数年後に必ず報告します。



群大産婦人科同門ゴルフ愛好会

役員会だより

第7回役員会 (平成21年12月17日)

出席者 森川会長 他22名

報告事項

1. 法人のその後の活動について
2. 伊勢崎支部会について
3. 九州支部会について
4. 重粒子線照射施設への支援について
5. その他

協議事項

1. 学術集会補助金について
2. その他

第1回役員会 (平成22年1月28日)

出席者 森川会長 他18名

報告事項

1. 法人のその後の活動について
2. 医学部代表者及び新任教授との懇談会について
3. 平成21年度定年退任教授の送別会について
4. レジデントと学生との座談会について
5. 神奈川県支部会について
6. その他

協議事項

1. 表彰・学術集会補助金制度規約の一部改正(案)について
2. 交換留学生補助金について
3. 卒業時同窓会表彰学生の選考について
4. 平成22年3月卒業生に対する記念品について
5. 教育研究センターシンポジウム招聘者への旅費等立替えについて
6. その他

第2回役員会 (平成22年2月24日)

出席者 森川会長 他17名

報告事項

1. 法人のその後の活動について
2. (財)群馬健康医学振興会理事会及び評議員会の開催について
3. その他

協議事項

1. 学位記授与式及び謝恩会について
2. 平成22年度新入生歓迎行事について
3. その他



【採用】平成22年4月1日

松崎 利行 (平9卒) 生体構造学教授

【昇任】平成22年4月1日

半田 寛 (平2卒) 附属病院血液内科講師
鈴木 秀樹 (平2卒) 附属病院消化器外科講師
岸 裕司 (平6卒) 附属病院周産母子センター講師
佐藤 浩子 (平8卒) 附属病院救命・総合医療部講師



平成22年4月1日

都築 馨介 (昭61卒) 文教大学健康栄養学部教授

謹告

ご逝去の報が同窓会事務局に入りました。
ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

正会員

昭和25年卒 小川嘉和先生 (平成20年1月21日逝去)
昭和35年卒 阿部良治先生 (平成20年4月11日逝去)
昭和25年卒 神保 昭先生 (平成21年3月30日逝去)
昭和35年卒 河井啓三先生 (平成21年10月29日逝去)
昭和23年卒 溝口勝司先生 (平成21年12月18日逝去)
昭和30年卒 木村泰人先生 (平成21年12月21日逝去)
昭和24年卒 田村隆始先生 (平成22年1月12日逝去)
昭和23年卒 岡田順吉先生 (平成22年1月25日逝去)
昭和30年卒 松山四郎先生 (平成22年2月17日逝去)
昭和25年卒 雨宮修二先生 (平成22年2月23日逝去)
昭和24年卒 後藤鹿島先生 (平成22年3月3日逝去)
昭和44年卒 武井朗夫先生 (平成22年3月11日逝去)

名誉会員

大江 千廣先生 (平成22年1月5日逝去)

特別会員

元事務局長 栗原 又雄氏 (平成22年2月24日逝去)

編集後記

騒がしかったこの年度でしたが、卒業生の笑顔とともに、平成にじゅういんふるえんども終わりを告げました。刀城クラブ会報は、原稿受付、企画、役員会での承認、原稿依頼、割付、校正の手順を経て発行されます。日本列島を寒波が襲った日に編集会議が開かれ、委員が厚着だったのが原因ではないと思いますが、行事が重なりまた多くの記事が寄せられて26ページの厚い会報となりました。事務局に寄せられる写真付きの原稿を拝見して、同窓生の元気な姿を懐かしむことは、会報を受け取る会員の皆様だけでなく編集委員の楽しみでもあります。にこやかな写真が同封された原稿がたくさん寄せられることを心待ちしています。

(萩原治夫)

編集委員

福田利夫(昭51卒)、平戸政史(昭53卒)、萩原治夫(昭56卒)、藤田欣一(昭56卒)、安部由美子(昭57卒)、星野綾美(平13卒)、宮永朋実(平15卒)、青木誠(平22卒)、稲葉敦(平22卒)、関口淳一(事務局)